城の歴史

戦国時代の鳥取城

城は、16世紀中頃、守護大名山名氏一族の争いの過程で誕生しました。はじめは因幡山名氏の守護所の出城でしたが、1573年(天正1)、山名豊国は本拠地を湖山池東岸の天神山城より移転し、以後、鳥取城は因幡国（鳥取県東部）の拠点となりました。やがて、毛利氏の傘下となり、天下統一を目指す織田信長の武将・羽柴（のちの豊臣）秀吉との間で壮絶な籠城戦が繰り広げられました。

この頃の城の姿は、戦闘時は山城を利用し、通常の居住空間は山麓にありました。敵が登りやすい尾根には、尾根を切り盛りして平らな敷地を造り、その周囲に切岸と呼ぶ急な斜面を造り防御としました。まさに城の字のごとく、“土から成る”城であり、城と言えばイメージされる石垣や天守はなかったと考えられています。

日本十大籠城戦　鳥取城の兵糧攻めと太閤ヶ平

吉川経家

天下統一を目指す織田信長は、1580・81年(天正8・9)の2度にわたり、羽柴（のちの豊臣）秀吉を総大将とし、毛利方の最前線であった鳥取城を攻めました。2度目の城攻めの際、籠城した吉川経家に対し、秀吉は、織田信長の指示に従い、圧倒的な兵力で包囲網を敷き、一切の補給路を断つ「兵糧攻め」を行いました。これに耐えた鳥取城ですが、やがて兵糧も尽き果て城内は悲惨な状況に陥ったと言われています。ついに吉川経家は、城内で共に戦った部下や、城に避難した民衆の命と引き換えに自刃し、城は開城しました。

この戦いは、鳥取の「渇え殺し」と呼ばれ、秀吉の天下統一の布石となる重要なものとなりました。

秀吉の本陣は太閤ヶ平（P13・14参照）と呼び、現在でも当時の土塁や空堀がほぼ完全な形で残っています。

安土桃山時代の鳥取城

兵糧攻めの後、新たに城主となったのは、豊臣秀吉の側近として活躍した宮部継潤でした。彼は鳥取城に石垣や天守を築き（近世城郭）、城の姿を一新したとされます。息子の長房は、1600年(慶長5）の関ヶ原合戦で西軍に与したため、鳥取城は、東軍の鹿野城（鳥取市鹿野町）主、亀井茲矩や竹田城（兵庫県朝来市）主、赤松広秀（斎村政広）などの攻撃を受け、徹底抗戦の末に開城しました。

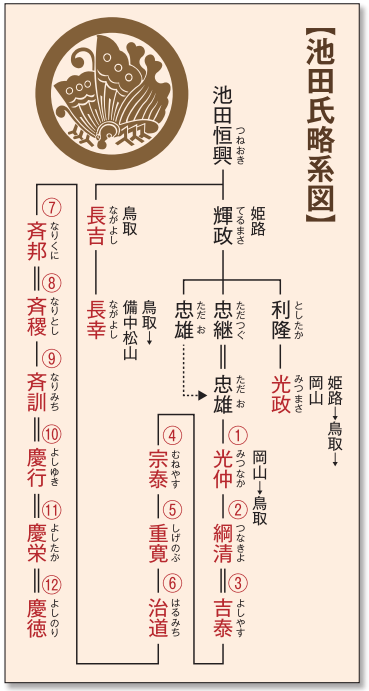
江戸時代の鳥取城

関ヶ原合戦後には、池田長吉が入ります。長吉は姫路城を築いた池田輝政の弟で、鳥取城は姫路城とともに、西国の豊臣系大名の抑えを担いました。

しかし、1615年(元和1)、大坂夏の陣で豊臣家が滅亡すると池田家は転機を迎えます。1617年(元和3)、姫路城主池田光政は所領減封の上、因幡伯耆32万石の領主として鳥取へ転封となり、現在の鳥取県域とほぼ同じ鳥取藩が誕生しました。

鳥取城は宮部時代から5、6万石規模の大名の居城に過ぎなかったため、池田光政は山麓を32万石の政庁として整備しました。

1632年(寛永9)、岡山城主池田忠雄の死去に伴い、3歳の光仲が家督を継ぐと、幕府は従兄弟・光政との国替を命じました。以後、鳥取城は光仲を藩祖とする鳥取池田家12代の居城となり、国内有数の大藩の政庁として存続しました。



鳥取池田家と徳川幕府

鳥取池田家の藩祖光仲の曽祖父は、徳川家康でした。そのため、鳥取池田家は特に江戸幕府から徳川家一門に準じて厚遇され、鳥取城は外様大名の居城としては唯一、城内の建物に葵紋の瓦を葺くことを許されました。鳥取城周辺や東京都内に残された数多くの遺構からはかつての栄華が偲ばれます。

鳥取県立博物館蔵

池田光仲

国史跡　鳥取藩主池田家墓所

（鳥取市国府町奥谷）鳥取城跡から車で15分

初代光仲から11代慶栄の藩主墓を中心に、大小78基の墓と、多数の石燈籠が整然と並んでいます。

特別史跡　江戸城跡 中之門石垣

（東京都千代田区千代田）

中之門は、江戸城本丸の正門にあたる最も重要な門であり、現存する石垣は、1704年（宝永1）に3代藩主吉泰が修理したものです。